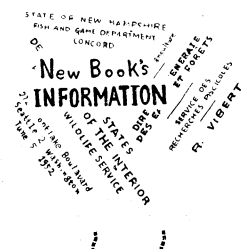

圖書紹介

ハツピー・ニュー・イアー・トウ・オール・リーダース

昨年中吾々圖書室に寄せられました、各方面の御支持に對し、紙上を通じて深く御禮申上げると共に、舊年中の出來事を今一度想ひ出して、新年への礎と致したいと思つております。本年も、より一層の御援助の程を心より御願ひする次第であります。

今を去る約一年前の一月二六日未明の火災は、吾々に多かれ、少なかれ、当場各員の心に、重大な衝撃を與へた。それと共に、嘗ての圖書室も、少なからず、混亂しましたが、どうやらその難を最小限度にとゞめることが出來ました。

昨年中に圖書室に到着した、国内、国外からの文献、書籍總數は二一六册の多きに達したが、これによつて、私達が遠く必要なものを讀みに行つた時と比較すると、時間的ロスと研究の能率とを考へる時、本当に研究面にプラスとなつて來たことを心より慶こんでおります。吾々の考へは日と共に進まなければならないが、それはかかる各方面の既報告によつて正しいものがつかみ得るのでないかと信じている。より新しい知識を得ることは、誠に樂しいものであり、その知識の蓄積に努力を盡すことは、それこゝ吾々各人の喜こびとしなければならないでせう。

ひるがへつて災害以前より毎月本誌に〃圖書紹介〃の欄を續けて來て、讀者の方々の便を計つて來たのではあるが、年と共に、時代に依り、この欄を擔當した人々の考へによつて變つて來ていることも事實でありませう。一昨年の何日の日からか、私がこれを受持つて、その結果が如何に利用され、考へられているかは、余り知らないが、私のベストを盡して、又時代と共に、より進展する樣に心がけたいと考へている。そして次から次へ、このバトンが渡されて行くことを望んでいる。私がバトンを受けつぐまでは、吾々の圖書室に買入される毎に、それ等著書の大体の抄錄をのせて、讀者にわかりやすく紹介して來たが、私が受繼いで、直ちに單行本だけでなく、在庫新著文献とわくを広めたが、間もなくあの災害に會つた。いきおい〃紹介〃と

云ふ眞意から、かけはなれて、毎月到着する目錄の觀を呈し、貴重な文獻の四散を防ぐ方向に傾向を選んだのは、これもやむを得ざることだつたことを御ゆるし願はねばならないでせう。

日が經つにつれ、段々と落付きを取もどし、圖書室も、讀者の方々の爲に整理しなほさなければならない事を取殘したまゝ、一九五四年の新春を迎へてしまつたのは殘念でしかたがない。私は本誌の續けられる限り、図書紹介の本來の使命に出來るだけ早く立返る樣に努力すると共に、時間のゆるす限り詳細にわかりやすく解說するつもりです。又目錄の樣な型式もそのまゝ存續させたいことと思つております。讀者がもつとフールにこの欄を御利用になり、各々の知識の昂揚に努められることを切望致しますと共に、図書室に對し倍舊の御支援、御助言を切に御願ひ申上げる次第です。

取敢へず一月初旬中に在庫したものをあげる事に致します。

※科　學　第二三卷　第一二號　一九五三
※同　　第二四卷　第一三號　一九五四
※自然科學と博物館　第二〇卷　第七—八—九號
※學　鑑　第一一卷　第一號
※北水試月報　第一一卷　第一號
北海道立水產試驗場發刊
※北方林業
林業試驗場北海道支場　移築落成記念號
社團法人　北方林業會發刊
※林業試驗場札幌支場研究發表會講演集
昭和二七年度
農林省林業試驗場札幌支場　発刊
※日本昆蟲図鑑　Iconographia insectorum Japonicorum
北隆館　發行
※改訂增補　日本動物図鑑
revised edition Illustrated Encyclopedia of the Fauna of Japan
北隆館　發行

此の度は、新春早々必要上図書室で買入した〃日本動物図鑑〃及び〃日本昆蟲図鑑〃に就いて簡單に紹介しませう。

科學が進んだ現在、吾々は余り図鑑と云ふものになれすぎて居る傾向があるために、その眞の價値に疎いのでなからうか、そのはては之れを輕視するが如きは大きなあやまりと云はなければならない。動物學が科

學の一部門として健全な發達を示し、我國で最初に動物図鑑が發刊されたそのはしがきに「本來我国の理科方面の學科は、多くは明治維新後に遽に輸入せられ、特に動物學の如きはその以前には殆んど何もなかつた。西洋諸國ではどの學問も順序を追つて、一歩々々發達した故に、その途中に種類の名稱を調べることに重きを置いた時代もあり、大概の種類は學名が知られて、誰でも自分で採集して來た標本の學名を自分で探し出せる樣な便利な書物も澤山出來ている。處が我國では外國で相當進歩した學問の一番上の所だけを切り取つて輸入した故に、恰も三階だけが先づ出來上つて、二階や一階が未だ出來ていない家の如く、全く畸形の狀態にあるを免れぬ……」と故丘淺次郎博士が述べて居られる。生物學研究の最も基礎となるのは、取扱ふ標本の、正確な名前が知られなければ、その後の研究にあやまりを生づる結果になり勝ちであり、はてはそれ等研究者並びに技術家の著作に重大な影響を及ぼす事を悟らねばならないだらう。それ等を考へる時に、博物分類學の泰斗と云はれる「リンネ」が嘗つてその書にのべた〃名が知られねば物は覺へられない〃Nomina si nescis Pertit et cognitio rerum は正に金言と云ふべきでせう。最初に動物図鑑が我國で発刊されて以來、幾度ならず改訂され、終戰後改訂增補されたのが、一八九八頁からなる此の図鑑である。此の動物図鑑の特徴は、各動物綱は、現代一流の專門家によつて執筆されて居り、各種の記載は、メルクマールのみでなく、可能な範圍で生態的記事をのせている。又、日本内地の動物のみならず、朝鮮、中国、滿洲等の近接地方のものも含まれている。尙最後部に〃動物學の基礎問題に関する解說〃をのせている。その内容を列記すると、動物の學名—江崎悌三、動物諸群間の類緣—駒井卓、日本及び隣接地域内の動物地理的分布—岡田彌一郎、日本に於ける動物學の歷史—上野益三諸博士によつて解りやすく述べているが、參考になる點が多い。一方昆蟲図鑑は執筆者四九名による一七三八頁のものである。以前の動物図鑑に昆蟲も六〇〇種程ものせられていたが、動物群の半以上を占るこの大きい昆蟲綱をこれだけでは完全とは云へないので、これだけを獨立させ、この図鑑が作られたのである。動物図鑑も昆蟲図鑑も各綱に分類的特徴を述べた〃概說〃は特に役立つ處が多い。動物群の各綱共、有名な專門家によつて執筆されて居る。此等二册は、簡單に各動物の學名を正確に知るのに最良の書と思ふ。

（擔當　正田豊彦）